

無三惡趣の願の意義

藤 嶽 明 信

1 苦悩の重さ

『大無量寿経』に説かれるように、法蔵菩薩の本願は、十方衆生の救済を願うものである。その衆生の救済のために浄土の建立が願われる。そしてそのことによって、法蔵菩薩自身が仏と成ることを願うものである。^①このような法蔵菩薩の本願・四十八願は、

たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。『大経』・真聖全一・八頁

ということから説き始められる。本願の最初に願われていることは、浄土には三惡趣が無いということである。それでは、この「無三惡趣の願」とは、如何なる浄土を願うものであり、そして、それは我々に何を語りかけているのであろうか。

三惡趣について、『無量寿経義疏』には、

地獄というは、地下牢獄なり。是れその苦処なり。故に地獄という。餓鬼というは、飢渴を餓と名づく。恐怯して畏多し。故に名づけて鬼となす。畜生というは、此れいまし生に従って畜養さるるを名となす。一切世人、あるいは敢食となし、あるいは驅使となしてこの生を畜養す。故に畜生とす。（慧遠『無量寿経義疏』・大正蔵・三七

と、纏められている。これによってみるに、地獄とは、たえず苦に苛まれる極苦の世界をいい、餓鬼とは、常に飢渴して満足することのない苦の世界をいい、畜生とは、畜育され従属することによって自由のない苦の世界をいうものであるといえよう。また、『往生要集』には、三悪趣など六道について詳細に叙述されている。そして、そのなかで、三悪趣の因について、地獄に関しては殺生等が掲げられる。また、餓鬼と畜生に関しては、

慳貪・嫉妬の者、餓鬼道に墮すと。『往生要集』・真聖全一・七四四頁)

畜生道を明さば、(中略) 愚癡無慚にして、徒に信旋を受け、他の物を償はざりし者、此の報を受く。『往生要集』・真聖全一・七四四～五頁)

と述べられている。これらよりすれば、三悪趣とは、殺生や貪・瞋・癡の三毒によって墮ちる世界である。そしてそのことはまた、殺生や三毒によって成り立っている世界が三悪趣であることを表すものであろう。

三悪趣ということが、上記のような事柄であるならば、「無三悪趣の願」とは、苦に苛まれ、飢渴し、畜養されるということや、殺生や三毒ということなどが、浄土には無いということを願うものであるといえよう。このように伺ってくると、三悪趣、あるいは無三悪趣ということは、全く了解不可能な事柄というものではなからう。一応それなりに了解し得る事柄であろう。しかしながら、そのような自分なりの了解というものは自己に救済ということを明らかにしてゆくような了解であろうか。十方衆生の救済を願う本願の第一願の内容として説かれる三悪趣・無三悪趣ということとは、やはり、十方衆生の救済が明らかになるような事柄として、人間に領かれなくてはならないことであろう。そして、人間の救済ということに深く関わる事柄として三悪趣の問題が表されているのが、韋提希、阿闍世、そして『観経』下下品の機ではなからうか。韋提希は、

唯、願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我当に往生すべし。閻浮提・濁惡世をば樂わず。

この濁悪処は地獄・餓鬼・畜生盈満し、不善の聚多し。願わくは我、未来に惡聲を聞かじ、惡人を見じ。『觀經』・眞聖全一・五〇頁)

と、広く淨土を願ひ、三惡趣を厭うということを通して、阿彌陀の淨土を明らかにされてゆく。また、阿闍世は、我今病重し。正法の王において惡逆害を興ず。一切良医妙藥咒術善巧膽病の治すること能わざる所なり。何を以ての故に、我が父法王、法のごとく國を治む。実に辜なし。横に逆害を加す。魚の陸に処するがごとし。乃至我昔かつて智者説きて言うことを聞きき、身口意業もし清淨ならずば、當に知るべし。この人必ず地獄に墮せん、と。我また是の如し。いかんぞ當に安穩に眠ることを得べきや。〔信卷〕・親全一・一六二頁)

と、必墮地獄の苦を通して、阿闍世自身を救う「無根の信」を明らかにされてゆく。また、『觀經』の九品の教説では、

下品下生というは、あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十惡を作る。諸の不善を具せん。此の如きの愚人、惡業を以ての故に應に惡道に墮すべし。多劫を経歴して苦を受くること無窮なるべし。此の如き愚人、命終の時に臨みて、善知識、種種安慰して、ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。此の人苦に逼められて、念仏するに違あらず。『觀經』・眞聖全一・六五頁)

と、惡道に墮する苦に逼められる下下品の機において、称名による往生が明らかにされてゆく。このように、人間の救済が明らかにされてゆく場面に深く関わる事柄として地獄等の三惡趣が表されているのである。

地獄等の三惡趣ということについても、人間はそれを対象化して了解してゆこうとするのではなからうか。例えば、三惡趣とは何時あるのか、死後か、現在か。また、何処にあるのか、地下か、地上か、と。しかし、韋提希によって「この濁惡処は地獄・餓鬼・畜生盈満して、不善の聚多し。」と語られるように、三惡趣は必ずしも命終後の世界として表されているわけではない。そこでは、現在の此の世界のこととして語られている。そのことは、三惡趣という

ことが、死後の世界として固定化され実体化されてゆくことが出来ない事柄であることを表している。そしてまた、阿闍世や下下品の機においては、命終の後に惡道に墮ちるということが恐れられている。そのことは、三惡趣とは現在のある状況の譬喩的表現にすぎないと言い切ってゆくことが出来ない事柄であることを表している。そこでは命終後の世界、「未来」の世界としての三惡趣が問題となっている。

このように、三惡趣は、或いは現在の世界として語られ、或いは未来の世界として語られているのである。それでは、三惡趣とは一体如何なる事柄を表わしているのであろうか。韋提希が厭うところの三惡趣の盈満する濁惡処とは、夫人、自身の苦に遇うて、世の非常を覺るに、六道同じく然なり。安心の地あることなし。『觀經疏』・真聖全一・四八五頁)

といわれるように、韋提希が幽閉せられるということによって、自身の苦として感ぜられているところの世界である。自身の苦の内容としてある三惡趣である。それは決して他人事ではないということである。韋提希は、厭うべき事柄として、殊に地獄・餓鬼・畜生の三品を掲げている。この三品について、諸師はその方処や様相等を註しているのに対して、善等は、

地獄等という已下の三品は、惡果最も重ければなり。(序分義・八三頁)

と、「重い」ということだけで表している。重さということは、それを担っている人のところにある事柄である。韋提希にとって三惡趣とは、そのことによって韋提希自身が押し潰されるような重い問題として、すなわち、自身の苦悩の内容として立ち現れている事柄なのである。また、阿闍世や下下品の機にとって、地獄等の惡道は未来の世界であるが、そこに必ず墮ちることを恐れているのは、正しく現在であり、現在の苦悩の内容としてある事柄である。

現在において限らない重さをもったこととしてある事柄である。このように表されるところの三惡趣とは、自身の苦悩ということと無關係に、その方処や時節や様相によって了解されてゆくような事柄ではない。また、眉をひそめて

眺めてゆけるような他人事でもないのである。

このように、人間の救済ということに深く関わって表わされるところの三悪趣ということは、他人事としてではなく、徹底して自身の苦悩の内容として表されている。一人の苦悩する人間、迷悶者の苦の内容として三悪趣が表されているのである。しかし、人間の日常において、三悪趣ということが本当に自己の問題となるということはあるのだろうか。確かに、人が生きてゆくということにおいては、様々な困難や承服しかねること、また、悲しみや苦しみというものに遭遇せざるを得ない。けれども、それらのことを本当に自分の問題として苦悩し、苦しみ抜いてゆくということは、人間には出来難いことなのではないだろうか。例えば、どんなに大きな問題であっても、それを他人事としてゆけるなら、何処かで自分を保ちつつそのことに関わってゆけるであろう。しかし、どんなに些細に見えることでも他ならぬ自分の問題となるときには、その人間にとって耐え難い重さをもってくるのではないだろうか。それ故に、様々のことにおいてその重さを回避しつつ生きているのであり、そのことによって様々のことが他人事となっているのではなからうか。苦悩するということは重さを担うということである。それ故に、極苦と表わされる地獄等が、自己の本当の問題となるということは、人間にとって如何に困難なことであろうか。そうしてみると、韋提希、阿闍世、下下品の機とは、自身の苦の重さに押し潰されながら、しかもそのことを回避せずして、そのところに立ち続けている存在に他ならないであろう。そして、そこにはその存在をして立ち続けしめずにはおかぬ何事があるのではなからうか。

2 苦悩の深さ

救済ということに深く関わって表わされるところの三悪趣には自己の苦悩としての重さがある。そして、それが殊に三悪趣として語られるところには、その苦悩のもつ深さということが表されているのではなからうか。韋提

希と阿闍世は、

善見聞き已りて、即ち大臣とともに其の父の王を収めて、之を城の外に閉ず。四種の兵を以て之を守衛せしむ。

毗提夫人是の事を聞き已りて、即ち王の所に至る。時に王を守りて、人をして遮りて入ることを聴さず。その時に夫人、瞋恚の心を生じて、便ち之を呵罵す。時に諸の守人、即ち太子に告ぐらく、大王の夫人、父の王を見んと欲をば、不審、聴してんや不や。善見聞き已りてまた瞋嫌を生じて、即ち母の所に往きて、前すんで母の髪を牽きて、刀を抜きて斫らんとす。〔信卷〕・親全一・一八一―一八二頁

と説かれるように、母と子でありながら、互いに瞋り憎み合わねばならなかった。瞋恚とは、不可意の対境に向って起るものである。それ故に、韋提希と阿闍世は、互いの心に適わない者として、瞋りの炎を燃やし合っているのである。それは地獄等と譬えられるべきことには違ひなからう。しかし、韋提希も阿闍世も、このような状況のなかで三悪趣ということを語っているのではない。三悪趣ということは、自身の苦悩の場面で語られてくるのである。韋提希や阿闍世がその苦悩のなかで語る三悪趣ということには、単に瞋嫌し合っているということでは押え切れない、人と人との間を生きる人間存在であるということの深い問題が語られているのではないか。

阿闍世による頻婆娑羅王の幽閉は、

太子、知れりや不や。世尊年老いて堪任せる所無し。当に之を除いて我自ら仏と作るべし。父の王年老いたまえり。また之を除いて太子自ら正位に坐したまうべし。新王と新仏と治化せん。豈楽しからざらんや。〔序分義〕・六〇頁）という、提婆達多の唆かしによるものである。しかし、阿闍世はこの悪計に初めから同意を示したわけではない。むしろ逆に、

太子之を聞きて、極めて大きに瞋怒して、是の説を作すことなかれという。〔序分義〕・六〇頁）と表わされるように、瞋りをもって拒否し、否定したのである。そこには父を想う子の姿がある。しかし、その拒否は、

太子瞋ること莫れ。父の王、太子において全く恩徳無し。初めに太子を生ぜんと欲せし時、父の王、即ち夫人を遣わして、百尺の樓上に在って、天井の中に當って生ぜしめて、即ち地に墮ちて死せしむることを望めしかども、正しく太子の福力を以ての故に、命根断えず。但小指のみを損せり。〔序分義〕・六〇（六一頁）

という、自分の誕生は父には望まれていなかったということを聞かされたことによって崩れ去ってゆく。そこには、父を想う子であるが故に、逆に父を憎んでゆくという、父と子との抜き差しならぬ関係が物語られている。そして、阿闍世は、せめて母だけは自分の味方であると思っていたにもかかわらず、父を助けようとする韋提希に失望し、「我が母はこれ賊なり、賊と伴たり。」（『觀經』）と、強い怒りを向けるのである。そこには、父と母と子であるにもかかわらず憎しみ合うというより、父と母と子であるが故の愛憎の世界があるのである。瞋憎が不可意の対境に向って起るのに対し、貪愛とは可意の対境に向って起るものである。そして、愛憎は自分の意に適う・適わないという我執より起るものであり、それは批判されるべき事柄に違いなからう。けれどもそこには、父・母・子が互いに相手を自分とは無関係な外物他人として割り切ってゆくことが出来ないという「人間」としての苦悩の問題があるのである。例えば、阿闍世の必墮地獄の苦悩にとって、六師外道の慰撫は何故に全く無力であったのだろうか。それは、六師によって如何に阿闍世の無罪が弁明されようとも、そのことは父王への逆害を一般化し、他人事としてゆくというものでしかなかったからではないか。阿闍世の苦悩は、決して他人事ではあり得ない父王に害を加えたというところにあるものである。父王の滅後も、阿闍世は父王との関係を生きているのであり、そういう関係を生きる阿闍世の全体が救済されてゆく道が明らかになること以外に、阿闍世の苦悩は解かれようがないのである。

そもそも、一人の人間において「他」が本当に問題となるのはどのようなことなのであろうか。それは、「他」を真剣に思い遣るということであらうか。しかし、その時には既に思う「自」と思われる「他」が分離しているのではないだろうか。阿闍世は、他人のことを思い遣って苦悩しているというわけではない。自身が地獄に墮ちるという全

く自分一人のことを苦悩しているのである。けれども、その徹底して自分一人の苦悩のところに、抜き差しならぬ事柄として父・「他」が問題となっているのである。そうしてみると、「他」が本当に自己の問題となるということは、徹底して自己一人の苦悩のところにその内容として「他」があるということではなからうか。

韋提希においても、頻婆娑羅と夫妻であり、阿闍世と母子であるという、業縁存在を生きる者であるというところにその苦悩の深さがある。韋提希は幽閉されることによって殺害されることから免れたのである。それにもかかわらず愁憂憔悴してゆく。その理由を善導は三義をもって見取っている。そのなかの二つは、

夫人既に囚難を彼つて、何れの時にか更に如来の面および諸の弟子を見たてまつらん。(「序分義」・七七頁)

夫人、教を奉けて禁じて深宮に在り。内官に守当して水泄ること通ぜず。且夕の間に唯死路を愁うる。(「序分義」

・七七頁)

という、今はもう仏にも仏弟子にも遇うことができないということと、何時死ぬかも知れないという、韋提希自身に関わることである。しかし、

夫人、既に自ら閉じられて、更に人として食を進めて王に与うるものなし。王、また我が難に在るを聞きて、うたた更に愁憂せんことを。今既に食無くして憂を加えば、王の身命定めて久しからざるべき。(「序分義」・七七頁)

と、表されることは、頻婆娑羅王の心身を案じて憂うものである。そこには、幽閉によって自身が殺害されることから免れたということで済ませてゆくことができない、夫との関係を生きている韋提希がいる。自分の命が助かったということだけでは解消されないところに韋提希の苦悩の深さがある。頻婆娑羅の幽閉に際しての阿闍世に対する瞋恚と呵罵も、頻婆娑羅に対する韋提希の想いを抜きにしては考えられないことである。

しかし、このように愛憎のなかで煩悶憂苦するということは、王舎城だけに起ることではなく、日常的に散在することであろう。それは決して特殊な事柄ではない。けれども、そういう愛憎のなかに生きている自己が、本当に自分

の問題となる、すなわち、「問い」とまでなるということが、人間にはないのではなからうか。韋提希は、予期しない仏陀の王宮への出現において、自ら璣珞を絶ち、身を地に投げ号泣して、

世尊、我宿何の罪ありてか、此の惡子を生める。『觀經』・真聖全一・五〇頁)

と訴える。それは、自身の罪を尋ねるという姿をとっているが、その実は、負うべき理由のない苦を負わされているということを訴える愚痴に他ならないであろう。阿闍世が我が子でなかったらとおもうものであろうし、阿闍世を受容し切れないという訴えであろう。しかし、

世尊、復何等の因縁有りてか、提婆達多と共に眷屬たる。『觀經』・真聖全一・五〇頁)

と続く言葉には、

一には夫人怨を子に致す。忽に父母に於て狂^{たふ}れて逆心を起すことを明す。二には恨むらくは、提婆、我が闍世を教えて斯の惡計を造らしむ。もし提婆に因らずば、我兒終に此の意無しということを明す。此の因縁のための故に斯の問を致す。〔序分義〕・八二頁)

と表されるように、阿闍世を怨みながらも怨み切れず、罪を提婆に転嫁してゆく母の姿がある。阿闍世を受用し切つてゆくこともできず、かといって、怨み切つて捨て去つてゆくこともできないところに韋提希の苦悩の重さがあり、深さがある。それ故に、韋提希が世尊に陳訴する「我宿何罪」の言葉は、自身の罪を問うようでありながら、自身の罪を否定し、罪を阿闍世に牽め、提婆に牽め、ついには世尊に牽めるといふ責任転嫁の愚痴に他ならないけれども、そのような愚痴は、世尊を目の前にして出たことである。仏弟子による慰撫を求めて止まない韋提希の心が、予期しない仏陀の出現によって破られるということにおいて起ったことである。それは愚痴にはちがいないが、そこには苦悩する者の全存在を挙げた訴えがあり、虚飾のない問いがある。その問いとは、理不尽な現実を生きてゆかなくしてはならない韋提希自身の存在を問うものであるが、そこには受容も排捨もし切れない阿闍世と母と子である関係

を生きる韋提希が問題になっているのである。

韋提希が発した「問い」は、釈尊の絶対の沈黙をくぐって、

唯、願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我当に往生すべし。閻浮提・濁惡世をば樂わざるなり。此の濁惡処は、地獄・餓鬼・畜生盈満し、不善の聚多し。願わくは我、未來に惡聲を聞かじ。惡人を見じ。今、世尊に向いて、五体を地に投げ、求哀し懺悔す。唯、願わくは仏日、我を教えて清淨の業處を觀ぜしめたまえ。『觀經』・眞聖全一・五〇頁)

という、欣淨厭穢の「願い」として明らかにされてゆく。それは、釈尊の沈黙をくぐることによって、韋提希の苦悩の根底にある願いが、韋提希自身に明らかになったということである。そしてそれは、自分の意に適う外物他人を貪愛し、意に適わない外物他人を瞋憎するというものではなく、

これ閻浮の総て惡にして、未だ一處として貪すべきこと有らざることを明す。但し、幻惑の愚夫なるを以て斯の長苦を飲む。「此濁惡処」と言うは、正しく苦果を明すなり。〔序分義〕・八三頁)

と表されるように、可意・不可意によって愛憎し、自損損他する此の濁惡処の全体が、貪るべき世界でないとはっきりと厭われたということである。そのように厭われるべき濁惡処の内容として、地獄・餓鬼・畜生の三惡趣が語られているのである。それ故に、三惡趣とは、單に在る世界でもなく、また、在るべき世界でもなく、

然も「願我未來不聞惡聲惡人」というは、此れ閻王・調達の子を殺し憎を破す。及び惡聲等、願わくは、また聞かず見じということを明す。但閻王既に是れ親生の子なり。かみ父母に於て殺心を起す。何に況んや、疎人にして相害せざらんや。是の故に、夫人、親疎を簡ばず、総じて皆頗に捨つ。〔序分義〕・八四頁)

と述べられるように、子が父を殺害すること、そして、仏陀との出遇いを通して知らされた深い悲しみと願いにおいて、在るべからざる世界として明らかになった事柄である。

このように、韋提希や阿闍世の救済ということに深く関わる事柄として語られているところの地獄等の三惡趣とは、自身の苦惱としての重さを表すものであるし、そして、その苦惱が抽象的な個人としてのものではなく、業縁存在を生きる者としての苦惱であるという、苦惱の深さを表すものであるといえよう。そうであるならば、三惡趣とは、人と人の関係を生きる存在であるということにおける正しく「人間」の苦惱の重さと深さを表すものであろう。そして、三惡趣ということが徹底して「人間」の苦惱の問題として表されているということを通して、浄土莊嚴の本願の第一番目に願われる「無三惡趣の願」の意義ということを、窺ってゆけるのではないであらうか。すなわち、「無三惡趣の願」とは、徹底して「人間」であるということに苦惱する存在に、「人間」としての救済を明らかにするものではなく、したがってそれは、「人間」であることを捨象しての救済ではなく、あくまでも「人間」としての救済を明らかにすることを願うものであろう。

本願は、十方衆生の救済を願う。それは、人間のみならず、生きとし生けるものの救済を願うものである。韋提希や阿闍世の苦惱とは、人と人の関係における苦惱であり、しかも父・母・子ということのなかにおける苦惱である。それは如何にも限られた範囲でのが問題となっているということには違いなからう。けれどもその問題は、韋提希や阿闍世にとって、それが解かれなくては「生きても居られず、死んで往くことも出来ぬ」『清沢満之全集』第六卷・二三〇頁）自身の苦惱としてある問題なのである。そのような、自身の苦惱としての問題ということを外すならば、生きとし生けるものの救済ということも、観念化されてゆくのではないであらうか。生きとし生けるものということは、業縁存在であるという自己の存在の深さとして在る事柄であらう。しかし、そのことは、自己の苦惱の深さとして問題になる時に、他人事ではない問題となるのである。そうしてみると、一人の人間が、自身の苦惱に取り組み、そのことを解いてゆくということにこそ、十方衆生の救済ということが明らかにされてゆく具体的な場所があるということではなからうか。韋提希や阿闍世の苦惱の内容として地獄等の三惡趣ということが表わされ、本願の第一願

として無三惡趣ということが願われるということは、そのようなことを教えるものではないであろうか。

3 無三惡趣の願の意義

韋提希の愚痴の姿をとった問いは、釈尊の沈黙をくぐって、欣淨厭穢の願いとして明らかにされたのであるが、それは韋提希自身による選びであり、自己決定である。しかし、その自己決定は、

これは仏説の淨土の無生を聞きて、穢身を捨てて彼の無為の樂を証せんと願う。〔序分義・八三頁〕

と述べられるように、仏説が聞こえたということによっておこったことであると表される。すなわち、三惡趣を厭うということは、仏陀の教えが聞こえるということにおいて初めておこり得たことであるということである。人と人が傷つけ合わなくてはならないということを悲しみ、本當に厭うような心は、韋提希におこった心には違いなが、仏陀の教えが聞こえるということにおいておこったことである。そしてそのことは、無三惡趣の本願が人間に呼び掛けつつあるということを表すものであろう。無三惡趣の願とは、三惡趣と譬えられるような外的な状況や状態が無くなったり、或いは、人間がそのことに無感覺になったりすることを願うものではなく、人間が三惡趣ということを自身の問題とし、問題とすることによってそのことが本當に解かれてゆく道を自身に明らかにしてゆくことを願うものではないであろうか。

それでは、韋提希や阿闍世の救済ということは如何なる事柄として説かれてゆくのであろうか。韋提希の救済ということは、通請所求（広く憂悩なき処への往生を願う）・別選所求（別して阿弥陀の淨土への往生を願う）・華座得忍（華座觀において見仏得忍する）ということをもって表されてゆく。そして、その見仏ということとは、

それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願〔歎異抄・眞聖全二・七九二頁〕
といわれるように、罪惡深重煩惱熾盛の自身の信知において、本願の仏に値遇したということに他ならないであろう。

自己が明らかにされるということにおいて自己を救済する如来が明らかにされてゆくということは、「散善義」の九品の教説として徹底されてゆく。そしてそこに、下下品の機における念仏往生ということが説かれてゆくのである。下下品の機とは、自己の造罪を熟知するが故に、必ず惡道に墮することを苦惱する者である。確かに、韋提希も三惡趣ということに苦惱する者である。しかしそれは、

此れ夫人、既に自ら障り深くして宿因を識らず。今兒の害を被むる。是れ横に來れりと謂う。（『序分義』・八一頁）と表されるように、自身には罪の覚えなくして負わされている重荷としてある事柄であつた。そこには自身の罪障ということが不明であり、「それほど業をもちける身」を「たすけんとおぼしめしたちける本願」の仏も不明である。その韋提希の救済ということが、見仏得忍、そして九品の教説ということを通して明らかにされてゆくところには、罪の身の自覺の徹底ということにおける救済の成就が表されているのであるといえよう。そのように、人間を救済してゆくような、自身と本願への目覚めの深さを善導は「深信の心なり」（『散善義』・一七二頁）と表す。それは、人間の意識より深く、人間の意識に先立つて在る、人間存在の事実への領きである。

それでは、必墮地獄の苦に逼められるとはどういうことであろうか。それは、不安とか恐怖という言葉では押さえ切れない事柄である。何故なら、必墮地獄の苦惱とは、自己の造罪を熟知するが故の慙愧ということを表すものであるからである。必墮地獄に怯えて安眠することが出来ないと言へる阿闍世に向つて、耆婆は、

善哉善哉、王、罪を作すと雖も、心に重悔を生じて慙愧を懷けり。大王、諸仏世尊常に是の言を説きたまわく。二の白法有り。能く衆生を救く。一には慙、二には愧なり。（中略）無慙愧は名づけて人とせず。名づけて畜生とす。（『信卷』・親全一・一六二頁）

と告げる。必墮地獄に怯えるということは、救済なき造罪の自身に苦惱しているということである。けれども、その苦惱としてある慙愧こそが阿闍世をして「人」たらしめているのである。そして、「人」であるところこのみ、

救済なき阿闍世に救済の道が開かれてゆく機縁があると著婆は教えるのである。必墮地獄の苦悩とは、人が人であろうとする苦悩であり、そのことによって人が人たらしめられてゆくような慙愧のことを表すものに他ならない。そのような必墮地獄の苦悩・慙愧において阿闍世は、仏陀との値遇によって「無限の信」を明らかにされてゆくのであり、下下品の機は善知識との値遇によって念仏往生の道を明らかにされてゆくのである。

それ故に、三惡趣とか三惡趣のない淨土ということが説かれるということの意義とは、三惡趣という苦界を説くことによって人を怯えさせておいて、三惡趣のない淨土を説くことによって人を安堵させてゆくというような、脅逼と慰撫ということがあるのではない。無三惡趣の願とは、人間であるということと人間が本心に問題にすることを通して、人間として生きてゆく道を明らかにしてゆくということを、人間に呼び掛けるものではなからうか。

註

引用文について

一、「親全」とは、「定本親鸞聖人全集」の略である。

一、「真聖全」とは、「真宗聖教全書」の略である。

一、「玄義分」「序分義」「定善義」「散善義」の頁数は、「定本親鸞聖人全集第九卷・加點篇(三)」のものを示す。

一、漢文は書き下した。

本文のなかの註について

① 四十八願に関して、慧遠の『無量寿經義疏』(『大正藏』三七卷・一〇三頁b)には、「撰法身願」(第十二・十三・十七願)、「撰淨土願」(第三二・三三願)、「撰衆生願」(余の四三願)という三分類の了解がある。また、香月院深勵の『淨土三部經講義1・無量寿經講義』には、「四十八願がのこらず撰淨土の願なり。のこらず撰衆生の願なり。のこらず撰法身の願なり。」「四十八願に真実の願と方便の願とを分つ」等の了解を見ることができらる。

② 慧遠の『觀無量寿經義疏』には、「地獄畜生餓鬼盈滿」とは三途の惡道の果あることを明すなり。「地獄」とは外国に名づけて泥梨という。雜心釈には樂しむべからざるが故に名づけて地獄とす。地持釈には増上厭うべきをいう。名づけて泥梨という。

此れ皆厭心に約就して以て積す。是れ当相に非ず。当相にて之を論すれば、地下の牢獄なり。是れ彼の罪人の受報の処故に地獄という。「畜生」というは、雑心積に言うに傍行を以て名づけて畜生となす。此れ乃ち相を弁ずるも名義を解するに非ず。名義とはいかん。蓋し乃ち主の畜養に従うを名となす。一切の世人、あるいは驅使となし、あるいは噉食となして此の生を畜養する。故に畜生という。「餓鬼」というは、雑心積にいわく、多く求むるを以ての故に名づけて餓鬼となす。此れ亦相を弁ずるも名義を解するに非ず。正しく名義を解すれば、飢渴を餓と名づけ、虚怯多畏、之を目して鬼となす。三千刹土同じく此の悪あり。故に「盈満」という。『大正蔵』・三七卷・一七七頁b c) とある。また、智顗の『観無量寿仏経疏』には、「三途のなか「地獄」は泥型と名づく。積して不可樂と云う。「畜生」は旁行をいう。主に従って畜養され、人の為に驅使せられ食噉せらる。「餓鬼」は飢虚怯畏なり。三千刹土同じく此の悪あり。故に「盈満」という。』『大正蔵』・三七卷・一九〇頁c) とある。